

未就学児・小学生の交通事故について

C1250763	加藤	らな
C1251455	佐藤	優桜
C1251834	高橋	美陽
C1252727	山本	結菜



1 問題

現状と理想の状態

現状

○長期的には、子供の交通事故による死者・重傷者は減少傾向にある。

しかし、重大事故は継続して起きている。

○未就学児・小学生共に「歩行中」の死者が最も多く、未就学児については6割、

小学生については5割を占めている。

○未就学児については「自動車乗車中」の死者が「歩行中」に続き4割近くを

占めており、小学生については「自転車乗車中」の死者が3割近くを占めている。

○小学生の歩行中の交通事故は月別では10月が最多であり、時間帯では午後3時台が

最多である。（令和元年から令和5年の小学生の歩行中の交通事故より）

理想的状態

- 子供が交通ルールを生活の一部として理解している。
- 見通しの悪い交差点を改善したり、スピード超過の取り締まりを強化し子供が特別に気をつけなくても、重大な交通事故が起きない。
- 交通安全教室でなぜ危ないのかを体験・可視化する教育を全国で行う。

2

原因と問題

仮説設定し整理する



原因 1

<子供の特性>

- 1, 感情のコントロールができず、衝動的な行動をとる
- 2, 一点に集中しがちで、安全確認ができない
- 3, 視野が狭く、視覚・知覚機能が十分に備わっていない

子供の特性より…

- 自分の興味に気を取られてしまい飛び出し事故につながるのでは。
- 子供の視点では見えない・認知できない(難しい)危険が多いのでは。

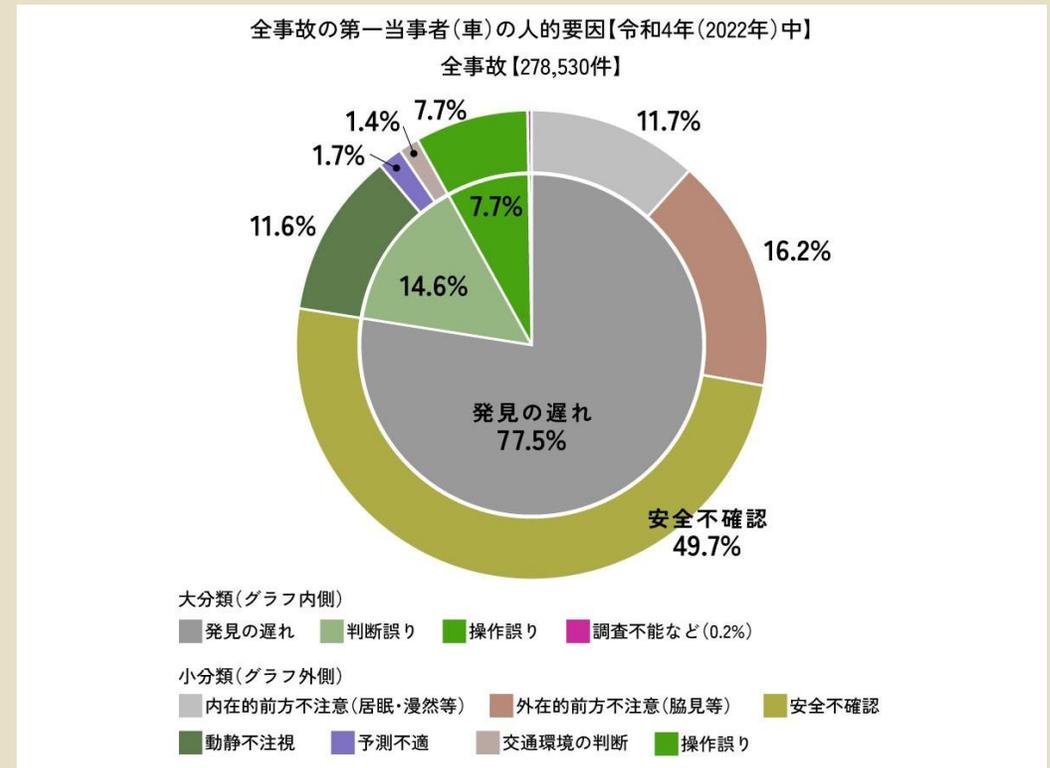
原因 2

右の図より

発見の遅れによる交通事故が多い。

その中でも、安全不確認による事故が多いことが分かる。

このことから、子供の飛び出しだけでなく
ドライバーの安全不確認も事故につながる
原因になるのではないかと考えた。



問題点

- 交通安全教室で交通事故の危険性が子供に伝わっていない
- 子供目線での道路設計が行われていない
- 一時不停止、速度超過の取り締まりが一定の場所でしか行われていない
- 小学生になると家に帰ってきてから友達と遊ぶことが増え、
親が同伴していない状態での外出が増える。



3

課題の設定

課題

子供の交通意識を向上させ、未就学児・小学生の交通事故件数を減少させるためには

A group of people, including children and adults, are crossing a street at a crosswalk. The scene is set in an urban environment with buildings and trees in the background. A speed limit sign (30) and a no-parking sign are visible on the left. The overall atmosphere is busy and active.

4

解決策の提案

解決策

○Good Driver制度

制限速度を守った人に1回1ポイント付与し、そのポイントがたまるとガソリンの割引券を配布する。

○子供が主役の逆交通安全教室

学校の授業の一環として小学生が“危険探し町探検”を行う。
そこで見つけた危険を授業参観の際に親に発表する。
また、地域活動の一環として地域の方たちにも発表する。

○スタントマンによる交通安全教室

市区町村で集まり、スタントマンによる交通安全教室の普及率を高める。

○子どもについて知る会

未就学児の親を対象に子ども目線を体験してもらったり子どもの特性についての講義を開催する。

5

期待される効果・課題



期待される効果

- 交通安全の意識が高まり、交通事故が減少する。
- スピード違反による交通事故が減少する。
- 未就学児の特性への理解がひろがる。
- 交通事故が危険であるという認知ができるようになる。
- 子供と大人の間で共通認識が生まれる。
- 市区町村別で危険個所を子供と大人で共有することができる。

今後の課題

○スタントマンによる交通安全教室の刺激が強く、

小学校低学年には向いていないかもしれない。

→小学校低学年には別の策をとる必要がある

○逆交通安全教室や子供について知る会の参加率が低くなる可能性がある

→休日に開催したり、周知する過程が必要

○Good Driver制度をどこで取り入れるかによっては不平等が生まれてしまう

→国民が平等にポイント制を受けれる制度が必要となる